2025 年 3 月 22 日
13:00～16:15

繊維学会 第 714 回 理事会議事録

1. 確認事項

出席理事　辻井敬亘、濱田仁美、増田正人、村瀬浩貴、松葉豪、永田謙二、上髙原浩、氏家誠司、内田哲也、武野明義、道信剛志、花田朋美、木村睦、櫻井伸一、巽大輔、森下美由紀、大松沢明宏、出口潤子、増森忠雄、清水宏泰、東城武彦、石澤仁志
監　　事　大田康雄、小原奈津子、土田亮
欠席理事・監事　中澤靖元、末信一朗、竹中幹人、髙﨑緑、神山統光、山崎睦生、小泉聡、香出健司　（順不同、敬称略）
会　　場　ハイブリッド開催（対面:繊維学会事務局、オンライン（zoom））

理事 30 名のうち、出席理事 22 名、監事 3 名の出席を確認し、定款 36 条により本理事会は有効に成立した。本理事会は、ハイブリッドにて開催し、理事の意思表明は発言や挙手にて決議することを確認した。続けて、辻井会長が議長となり第 714 回理事会議事へ移った。

2. 審議事項

1）会員入退会について・・・＜資料 1＞

３月 19 日（金）現在の会員数の詳細（正会員数 999 名（正会員 933 名、名誉会員 15 名、永年会員 51 名）、学生会員 224 名、維持会員 9 団体、賛助会員 89 団体）
・新規正会員は漸増的に増えてはいるが、退会者数がそれを上回るスピードである
・今回の退会理由の多くは年齢によるものや、退職に伴うものであった
・学生会員は 2025 年年次大会への参加に伴う新規入会の増加と、卒業に伴う学生会員の退会により大きく変動があった

【審議結果】
入退会報告について、正会員 8 名入会、29 名退会、学生会員 115 名入会、343 名退会、維持会員 1 社退会、賛助会員は増減無しで異議なく承認された。併せて、理事各位へ会員増強についての協力が求められた。

2）2024 年度 学会賞他各賞選考結果について・・・<資料 2>

【学会賞】小林 元康 工学院大学 先進工学部 教授
「高分子電解質ブラシによる機能性表面の創出と水界面構造解析」
【技術賞】堀 照夫 サステナテック株式会社 、廣垣 和正 福井大学 教授
「超臨界二酸化炭素流体を用いる精錬・染色・機能加工技術の開発」
【奨励賞】江口 裕 名古屋工業大学大学院 工学研究科 助教
「金属チオラートからなる繊維状配位高分子の構築」
【奨励賞】冨澤 錬 信州大学 繊維学部 助教
「配向結晶化挙動の定量解析から推定したポリエステル繊維の強度発現メカニズムに関する研究」
【功績賞】武野 明義 東海国立大学機構 岐阜大学 教授

「高分子・繊維の複合構造制御のナノ多孔設計による機能材料の創出と応用展開」
・2025 年 2 月 15 日(土)にオンラインにて選考委員会を開催
学会賞 1 件、技術賞 1 件、奨励賞 2 件、功績賞 1 名の応募者より選考を行った
・本理事会で承認された場合、受賞者紹介記事を学会誌 5 月号へ掲載し、年次大会 2 日目、 6 月 12 日(木) 16:00 より表彰式と受賞講演を実施
(授賞式司会 村瀬副会長(運営委員長)、受賞講演座長 増田副会長(財務委員長))
【審議結果】
功績賞、学会賞、技術賞、奨励賞の選考委員会結果について、異議なく承認された。 6 月の授賞式において各賞授与が確定した。

3) 2024 年度 論文賞候補者選考経過と結果について(審査委員長・武野編集委員長)
・編集委員による評価の高い論文 7 編および論文ダウンロード数の統計データを添え、2024 年 JFST 掲載の全論文について、選考委員(14 名)に持ち点 6 点を配点、得点上位 3 編について論文賞の候補論文とした
【論文賞】10 月号 一般論文
「繰り返し使用可能な炭素繊維を再生する新しいリサイクルプロセスに関する研究」
永田 康久、 山本 和弥、 岡田 祐二
【論文賞】8 月号 一般論文
「カードラントリプロピオネート繊維の配向結晶の観察と微生物産生ポリエステル繊維との比較」 木村 尚敬、加部 泰三、木村 聡、岩田 忠久
【論文賞】2 月号 一般論文
「イノシトールの酸化物を利用した羊毛の濃色着色 」大江 猛、吉村 由利香
・本理事会で承認された場合、受賞紹介記事を学会誌 5 月号へ掲載し、年次大会 2 日目、 6 月 12 日(木) 16:00 より表彰式を行う
【審議結果】
論文賞の選考委員会結果について、異議なく承認された。 6 月の授賞式において各賞授与が確定した。

4) 永年会員(50 年)について・・・<資料 3>
永年会員規程第 2 条により、称号を授与される者は、繊維学会およびその前身の繊維素協会、繊維工業学会の正会員として承認を受ける年の 12 月 31 日に、通年 50 年以上在籍の者とされており、2024 年度 12 月 31 日の該当者は 1 名
【永年(50 年)会員】菅沼 恵子 昭和学院短期大学 学長
【審議結果】
永年（50 年）会員の推挙について、異議なく承認された。よって、永年会員表彰状を授与（郵送）することが確定した。

5) 2024 年度本部収支見通しについて・・・＜資料４＞
・2024 年度本部収支見通し(2025 年 3 月 19 日時点)
・4 月 15 日(火)を提出期限として 6 支部・14 研究委員会への決算書類と事業報告書の作成を依頼済み
・辻本郷税理士法人 顧問税理士による確認、繊維学会監事、財務委員長による監査委員会を経て、5 月 24 日(土)理事会にて決算報告、総会資料作成の予定

【審議結果】
3 月 19 日時点での本年度本部収支、各行事収支確定数字が報告された。年次大会、秋季研究発表会、ISF2024 の多大なる貢献により、2024 年度決算はプラス収支での着地となることが報告された。各行事が好調であったことから、本年度は特定資産から学会賞、学生会員補助への取崩しは行わず、本部収支から充当することも諮られ、異議なく承認された。なお、各支部と各研究委員会からの決算報告書提出をまって、5 月開催の理事会で 2024 年度の最終決算報告を行うことも報告された。5 月理事会での最終決算報告書が承認され次第、総会資料として提出されることが伝えられ、異議なく承認された。

6) 2025 年度 小島盛男基金による学生会費補助について・・・<資料 5>
・補助金 総額 700,000 円/年間予算
【審議結果】
例年に従い、特定資産である小島盛男基金からの充当を予算計上していたが、本年度は本部行事好調により、取崩しは行わないことが異議なく承認された。

7) 2025 年度 リカレント教育支援制度募集について・・・<資料 6>
・募集期間、募集人数について
【審議結果】
支援方法、選考方法については例年を踏襲、変更はなしであることが伝えられ、異議なく承認された。また、次のとおり支援対象項目への一部追記と追加を行いこちらについても異議なく承認された。「研究内容(研究の目的、および、繊維分野との関係や波及効果等を必ず記載すること)」、「繊維学会での発表実績、および、これまでの論文投稿実績」、「奨学金を必要とする理由」募集開始 5 月 1 日、募集締切 6 月 30 日としてホームページ、学会誌などで広く会員に通知することとする。なお、昨年度の採択者に課せられた義務（繊維学会行事への参加や、JFST への投稿など）が実行されているかどうかについては、追って確認することも報告された。
・ISF 2024 で得られた収益は特定資産として積立、小島基金に追加されるのか。
そうでない場合には、収益の運用方法について会員に分かるように説明が必要になるのではないか。収入と支出のバランスを考えると毎年 200 万円ほど特定資産から取崩しして運営している現状。今回の ISF の収益をそれに充当すると 5 年分に該当する。特定資産として積立てないのであれば、今後どのようにバランスを取っていくのか明確な説明が必要ではないか。
→　今回の収益を小島基金へ上乗せすることは、現状考えていない。別途検討予定。
ISF2024 の収益分については、本部に取り込むということでは無く、今後の理事会で「どの特定資産にいくら積み立てるか」を検討する予定。

8) 繊維学会アクションプランについて・・・<資料 7>
資料に基づき以下の説明がなされた。「2024 ビジョン-心踊るつどいの場へ-」として様々な議論を行った結果、アクションプランを 8 つに絞って再度提案し、現在まで将来構想委員会で検討を行ってきた。学会の魅力度向上、新分野開拓、学術と技術の伝承、人財育成、会員増強、運営基盤強化という形のアクションプラン。ミッションは繊維学会の定款の通り「繊維に関連ある学理とその応用の進歩普及を図り、学術文化および産業の発展に寄与

することを目的」。ビジョンはミッション達成のために繊維学会として目指す理想像を表現する必要があると考え、それを踏まえて「心躍る集いの場へ」という形で表現している。

アクションプラン１として、情報共有・発信。プラットフォームの強化、特に情報発信体制の様々な強化、繊維に関する情報センターの役割を果たしていくことが繊維学会としての一つ目の役割と考える。それによって、繊維に関する情報はここに来れば得られるというような位置づけで、魅力度を向上していきたい。更に、研究者と技術者がマッチングできるような仕組み作りについて意見があった。新しい形の会員サービスを提供していけるような活動が今後必要。

アクションプラン２として、事業の更なる充実。年次大会等においての産学官や異分野との交流の拡大、繊維学会の専門領域をさらに深掘りし JFST のプレゼンスを向上させることを盛り込んだ。

アクションプラン３として、新たな会員獲得も必要で、分野交流のプラットフォーム構築。今まで繊維にあまり関係していなかった異分野の研究者を積極的に招き、深い議論が可能な交流の場を構築し、新しい学術の創発を目指す。

アクションプラン４として、国際連携の強化。既に、国際連携委員会でも議論いただいている国際人材ネットワークを高める仕組みを作りつつ、競争的資金の獲得やアジアにおける交流の推進を継続する。

アクションプラン５として、学術講座事業のリニューアル。既存の講座の刷新を行い、繊維関連の基礎教育を更に強化し、社会課題にフォーカスしたセッションの立上げなどより充実させていく。

アクションプラン６として、未来のリーダー育成。若手が主役となる活躍の推進、交流の場の提供、産業界と連携した実践的な学習の機会等を提供すること、若手や学生会員のスキル向上などの施策を取る。

アクションプラン７として、法人会員へのサービス向上。維持・賛助会員のニーズを反映し、魅力ある事業を提案していく。

アクションプラン８として、学会運営の効率化による財政の健全化。収入源を多様化し、学会運営を効率化するための具体的な措置を講じ、研究活動支援体制の強化を行う。また、委員等の負担を軽減し、より有効な会員活動の活性化をしていく。

具体的方策案として、フェーズ１では既存プラットフォームを活用していきながら、フェーズを変えて５年位でアクションプランを実行するイメージ。ただし、まだ議論の途上で、新規の取り組みの仕組み作りが必須。情報提供、特に若い研究者からはもっと SNS を活用した情報発信が必要なのではないかという提案あり。若手が主体となって活躍している姿が見える場を作っていくことも必要。

ただ、アクションプランの実行にあたっては、新しいことを加えることで現場が疲弊していく現状もあるのが実情。例えば夏季セミナーと秋季研究発表会を統合し、大きな研究発表会を年２回にする、基礎講座、応用講座、技術講座をリニューアルし、３つのイベントを２つに集約するなどの検討も必要と考えている。また、学会誌出版に関しても費用面や出版に関わる編集負荷を考えると現在の 12 号を６号にするなど検討が必要。また最終的には冊子を廃止し完全電子化へ移行していくなどの課題山積。

【審議結果】
会員各位へ公開できる状態とするため、本理事会での意見を反映して改善し、将来構想委員会でブラッシュアップしていくことを提案し、異議なく承認された。また、会員へ公開するにあたり、事前にメール審議を行うことも併せて承認された。
・このアクションプランは繊維学会がこれまで通り単独で活動していることを想定して検討したものか。
→　繊維学会が単独で活動することを想定している位置づけ。
・将来構想委員会では、学会のミッション実現のため、中長期的なアクションプランと方向性を示すべきとの意見もある。将来、運営の足枷にならないよう大きな方向性を示しつつも具体策についてはその時々の理事会で検討いただき実施するものと認識している。
→　その理解の通り。

3. 報告事項

1）繊維系三学会合併協議について・・・<机上配布>
会長・事務局長会議開催について辻井会長より、以下、報告された。
・２月末に３学会の会長・事務局で意見交換を実施。第一次合併協議案に対して繊維学会の公聴会や臨時理事会、支部等との意見交換会で様々なコメントや意見があったことを伝え、それらを反映した第一次合併協議案へのフィードバック提案をまとめ提示した。具体的には、事業のしっかりとした見直しが必要であること。特に、事務局問題やテキスタイルカレッジの見直し（現状事業の精査に基づく見直し）を協議会として合併の最終案に反映したいことなど。
・他２学会からも公聴会の実施状況が報告され、会員から様々な意見は出たものの、基本的には第一次案の方針で了解を得つつあるという内容であった。「持続可能な日本の繊維分野を牽引するような、新たな学会になるべき」点では一致を見ている。
（4月８日に合併協議会を開催予定）
・協議会メンバーに加え、ワーキンググループメンバーにも集まっていただき、具体的な検討を進める予定。各論はともかくとも、全体的なコンセプトを共有しておくことが大事と考える。３学会が抱える現状の問題を払拭し、新たな学会としてどういうふうに発展させていくのかを会員の皆様に提示し、賛同いただけるような提案をしていけるよう議論する予定。案を提示後は、学会毎の将来構想と見比べ合併するべきか否か、会員に選択していただくことになる。
・会員数の減少、企業・大学も学会運営に人を出しにくい状況が想定される中で、運営負担が重くのしかかっていることも事実。どのように持続可能な学会運営へ舵を切れるか、単に和集合となって基盤を厚くするだけではなく、新しいアイデアや運営方針を盛り込んでいく必要がある。会費収入の算定も難しい状況ではあるが、繊維学会内では多くの会員から財政面での懸念や心配する声もあることから、事業規模や予算規模の見直しも必須。財務プランの精査。ポイントとしては、実施事業の優先順位をつけ、収益に応じた事業規模を考えていくことが大事ではないかと考える。中長期的に日本を代表する繊維関連学会として新しいスタートをするためには、現状の活動実施の前提でなく議論すべし、というところも伝えたい。

・研究委員会の位置付けについてもゼロベースでの議論を提案する。運営面での関係者の負担軽減、事務局の業務効率化も重要。支部運営についても全国網羅型を基本に、区分けなど大きな見直しが必須であり、どのように会員へのサービスを展開できるか、プラットフォームの活用などを含め、今一度議論が必要。合併しなかった場合にも、繊維学会として支部の在り方をもう一度見直すタイミングではあると考えている。

・事務局に関しては、第一次合併協議案の中で２拠点体制を提案しているが、１拠点化へのロードマップは先送りせず、今回の最終案の中に入れておくべきであることを提案。（移行期として、３年から５年を目処に検討）大きな問題である事務局職員の雇用。事前に、社会保険労務士に待遇面についても相談を行ない、合併や事務局統合による職員へデメリットが生じることがあってはならないことが指摘された。人員を決める際に必要な事務局業務の棚卸し作業中、纏まり次第共有。今後、社会保険労務士同席のもと職員への面談を実施する予定。

・「学会運営業務負担の見える化」については、別途資料を用いて村瀬運営委員長より説明がなされた。新たなシステムを導入することも考えると、３学会合併により一定の効率化は図れるのではないかとのこと。

・４月８日の協議会にて、繊維学会からのフィードバック提案をベースに議論し、最終案として取りまとめ、もう一度各学会の理事会に持ち帰り、会員の皆さんに提示してよいかどうか、理事会としての判断を行う。その後、議決権行使。

・議決権行使以前に、会員の皆様へ説明する機会が必要と考えている。可能であれば、年次大会の際に、最終案を提示することができればと思う。残念ながら、会員の多くとはまだ意見交換ができていないのが実情。

・若手から要望いただいている、他２学会の若手との交流についても、共催行事など繊維学会から提案したいと考えている。

・仮に議決権行使で合併可となった場合にも準備に一年ぐらいはかかる。しっかりと議論をしたうえではあるが、最終的に決議行使をいつ行うか、繊維学会単独でやっていくのか、あるいは３学会合併に舵を切るのかの判断をこの半年くらいで議論したいと考えている。スケジュールについても改めて議論させていただきたい。

2) 各委員会からの報告について

① 運営委員会

・村瀬運営委員長

学会誌掲載 支部・研究委員会活動報告について・・・<資料 8>

→　４月号に支部の活動報告を掲載。研究委員会については、内規に従い２年に１回活動報告を掲載。今回は５月号、６月号の２号に分けて掲載する。活動状況として、少し停滞が感じられる研究委員会も若干あるため、年次大会期間中に開催する研究委員長会議にて、色々ご意見をいただき活性化を図っていきたい。

（本件に関する、理事からの意見は議事録後ページ、別紙参照）

② 将来構想委員会

・村瀬運営委員長

→審議事項の通り。

③ 国際連携委員会報告等について

・木村委員長

→官公庁で国際会議に対する潤沢な支援金がある。次回の国際会議開催に向けて、情報収集と、伝手作りもしていきたい。(資料共有あり；観光庁「将来の国際会議主催者育成のための地域・大学連携等促進事業」の公募について)

④ 企画委員会

・濱田委員長

→企画委員会　4 月 7 日(月)オンライン開催予定

→2025 年度繊維基礎講座　巽理事(WG リーダー)を中心に準備中

開催；7 月 31 日(木)8 月 1 日(金)

開催方法 オンライン（テーマ、講演者については検討、今後順次依頼）

3) 報告・連絡事項

① 東北・北海道支部（支部長　松葉理事）

・令和 7 年度化学系学協会東北大会(共催)2025 年 9 月 6 日(土)～7 日(日)開催

山形大学米沢キャンパス

・2025 年 繊維学会秋季研究発表会 山形テルサ(山形市)

2025 年 10 月 27 日(月)～28 日(火)開催

東北・北海道支部を中心に実行委員会を編成中

② 関東支部（支部長　中澤理事）

・2025 年年次大会準備状況について(道信実行委員長)

参加協力と、広告協賛依頼

③ 東海支部（支部長　永田理事）

・2024 年度繊維学会東海支部講演会 (主催)2025 年 3 月 19 日(水)開催報告

参加者は 10 数名、次年度はもう少し早い時期に開催を検討

④ 北陸支部（支部長　末理事）

・2024 年度 繊維学会北陸支部先端技術研究会及び福井大学繊維・マテリアル研究センター研究発表会(主催)2025 年 3 月 18 日(火) 開催報告

・令和 7 年度繊維学会北陸支部学術普及講演会“新しい繊維材料の開発動向”(主催)

2025 年 4 月 17 日(木)開催 福井県工業技術センター 講堂。

⑤ 関西支部（支部長　上髙原理事）

・第 39 回関西繊維科学講座“多糖とナノファイバーの基礎と応用最前線”(主催)

2025 年 1 月 28 日(火)開催報告

・関西繊維科学賞の授賞式、受賞講演開催

⑥ 西部支部（支部長　氏家理事）

・第 9 回 繊維学会西部支部若手講演会(主催)2025 年 3 月 11 日(火)開催報告

参加者は 30 名以上

・第 53 回夏季セミナー 別府国際コンベンションセンター(ビーコンプラザ)

2025 年 9 月 4 日(木) ～5 日(金)開催。

現在準備中、今後、講師依頼など順次手続きを行う予定

⑦ 研究委員会関係について

・感性研究フォーラム研究委員会
第 60 回「感性研究フォーラム」講演会 年間テーマ『ジェンダーと感性』
2025 年 3 月 12 日(水)開催報告
50 名程度が参加、大変盛況だった

4) 編集委員会からの報告について

① 繊維学会誌
→　内田編集委員長より順調に発行されていることが報告された。

② 論文誌 JFST
・論文賞選考委員会
・JFST ISF2024 特集号進捗
→　武野編集委員長より、投稿が集まりつつある状況が報告された。

5) その他案件

① 学会誌広告掲載計画と協力要請の依頼について・・・＜資料９＞
辻井会長、事務局より協力依頼

② タワーホール船堀について
2027 年秋以降から 2028 末までとして改修工事期間が決定。2027 年年次大会利用会場について、正式な検討開始の必要あり。物価高騰の折を受け、区議会や市民からの要望により利用料金、付帯設備料金の値上げについて議論が開始された

③ 今後の理事会日程について
【理事会】
2025 年 5 月 24 日(土)対面開催(京都大学東京オフィス@丸の内)
2025 年 9 月 20 日(土)オンライン開催
2025 年 11 月 15 日(土)オンライン開催
2026 年 1 月 24 日(土)2026 年 3 月 21 日(土)オンライン開催
【総会】
2025 年 6 月 13 日(金)
【監査委員会】
2025 年 4 月 26 日(土)対面開催(東京)

④ 今後の学会行事担当について
*2029 年 6 月年次大会　別会場手配について要検討

	2025 年	2026 年	2027 年	2028 年	2029 年
年次大会	関東支部	関東支部	関東支部	関東支部	関東支部
夏季セミナー	西部支部	北陸支部	東海支部	東北・北海道支部	西部支部
秋季研究発表会	東北・北海道支部	関西支部	関西支部	関西支部	関西支部

4. 監事コメント

【大田監事】まず、本日の議論について確認させてください。
総会に諮られる、あるいは会員へ合併協議案の最終案を提案することを決議する理事会が 5 月 24 日になるという理解でよろしいでしょうか？

→　4月8日の協議会での最終案の取りまとめ時期により、もし5月の理事会で承認をいただけた場合には、6月の年次大会で会員の皆様に説明をしたい。

3学会合併以前に、自分たちの今後のビジョンをしっかり整備するべきとの会員の皆様からご要望があってスタートしたと承知している。アクションプランが、大分まとまってきたと思います。ただ、三学会合併の議論が進む中、繊維学会のビジョンだけが出ていくのもどうかとも思うので、今後の出し方については、理事会でも協議していただきたい。仮に理事会として仮に三学会合併の決議を提案する場合、繊維学会としてあるべきアクションプランの目指す方向性に関して、3学会合併がそのアクションプランにおいて最善の手段であるという論理構成や道筋が必要と思う。
次に秋季研究発表会とISF2024について、非常に成功裡に終えられたこと、関係各位のご尽力に敬意を払います。今回の国際会議を通してコミュニケーションとかネットワークが活発に機能できたことも聞いているが、会議のコンテンツそのものが魅力的であったことも大きいのではないか？成功の要因（櫻井先生はじめ、若手の先生方のご活躍）をよく解析し、後に残していただきたい。今後、そのノウハウが役立ことになると思う。

【小原監事】
イベントなど滞りなく進められておりますこと、本当にご苦労様です。3学会合併に関する統合のメリットを強調するというのは当然ながら、慎重派や反対派に限らず、会員の不安点は、個別の負担が大きくなることではないかと思う。また財務的にどうなのかというのが今までの理事会や公聴会で多く聞かれた意見であった。統合を機会に、会員の負担を増やさず軽減していく方向であること、また財務的にも改革を進めたい、改善していきたいというところが大前提の方針であることをもっとクリアに打ち出してはどうか。それらに加えて、研究委員会活動や支部活動の意義なども一緒に考えていただくと、会員の皆さんが不安視されている部分をちょっとでも払拭できるのではないかと思いました。

【土田監事】
最初に、1年間を通じで様々な事業が非常に好調だったということ、関わられた皆様方には、本当にご苦労が多かったと思います。どうもありがとうございました。合併検討などでも色々な負担がかかっていると思います。ただ、学会運営のための収入を確保することは非常に重要ですので、行事など運営に関わっていただく皆様には本当に申し訳ないですが、ご努力いただければと思います。次に、支部の議論がされていましたが、支部というのは氏家理事がおっしゃられたように、若手育成には非常に重要な役割を果たすと思います。ただ、支部単位で夏期セミナーや秋季研究発表会などの運営は非常に大変だと思いますので、小さい支部は大きな支部から援助をいただくなども今後検討していってはどうでしょうか。村瀬運営委員長を中心にまとめていただいたアクションプランについても、何れ時期がきたら、学会誌やホームページなどで、広く会員の皆様方に展開していただきたい。